（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和５年度　海外派遣研究員研究報告書

令和７年５月６日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　芸術学部（芸術研究所）
資格・氏名　　教授・吉野大輔

☑本報告書の内容を公表することは，了承しております。
☐本報告書の内容を公表することは，差し控えください。
※いずれかにチェックし(■)提出すること

令和５年度海外派遣研究員（　長期　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　長期

２　研 究 課 題

アートセラピーを用いた遠隔心理支援とグローバルコンピテンシーの醸成に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦 2024 年 3 月 11 日　～　2025 年 3 月 20 日

４　派　遣　先　　フランス・スイス・イギリス・カナダ・アイスランド・ノルウェー・フィンランド・ドイツ・ポーランド・オーストリア・アメリカ合衆国・ニュージーランド・オーストラリア

５　研 究 目 的

現代社会において、心理的支援の必要性はかつてないほど高まっており、その提供方法も多様化している。特に、パンデミック以降、対面での支援が困難になる場面も増え、遠隔環境における心理的支援やセラピーの有効性と柔軟性が注目されるようになった。本研究では、アートセラピーという非言語的手法を軸とし、オンラインを通じた実践や事例収集を行うことで、遠隔環境における心理的安全性の確保と自己表現の可能性を探るとともに、国や文化を超えて他者と関わる上で必要とされる「グローバル・コンピテンシー」の醸成を促進する枠組みの構築を目指すものである。

グローバル・コンピテンシーとは、「多様な文化的背景を持つ他者と効果的にかかわる能力」であり、知識だけでなく、態度、価値観、実践的スキルを含む統合的な概念である。その育成には、単なる異文化理解にとどまらず、自分自身の認知や感情への気づき、他者との間にある関係性の質への感受性などが求められる。アート

セラピーは、その創造的で身体的なプロセスを通して、自己と他者との「間」に媒介物を置きながら関係を築く手法であり、こうした資質の涵養に有効であると考えられる。

本研究では、北欧・西欧・東欧・北米・オセアニア等、複数の文化圏において、アートが日常の中に根付く公共空間（図書館、公園、ミュージアム、子ども施設など）に注目し、子どもや市民の創造的表現がどのように支えられているかを参与観察や対話的調査の形で記録してきた。これらの知見は、アートセラピー的支援の枠組みが、福祉施設や臨床現場に閉じることなく、公共的な場の設計や運用にも関与できる可能性を示唆している。

特に今回の海外調査では、乳幼児を育てながらの滞在という制約のなかで、日常的な育児と調査が交錯する生活を送りつつ、プレイグラウンドや図書館などで行われているプログラムへの参与観察を通じて、子どもの遊びや表現の文化的特徴に注目したデータを蓄積することができた。こうした経験から得られた実践的知見を、今後、日本国内における教育的・臨床的実践に還元することが、本研究のもうひとつの目的である。

6　研 究 概 要

①研究の方法

研究は、以下の 3 つの柱からなる複合的な方法により実施された。

(1) 遠隔環境におけるアートセラピー実践の記録と分析

(2) 海外諸都市における公共空間の観察とフィールドノート、写真、動画の蓄積

(3) 参与観察による実践知の生成

② 渡航先での活動内容

(1)遠隔環境におけるアートセラピー的実践としては、遠隔地にいるクライエントとの間でオンラインを用いた表現活動の共有、並びに作品をめぐる言語的対話を試みた。日本国内における支援実践を、遠隔支援が制度的・技術的に先行する諸外国における実践事例と照らし合わせながら相対化・深化させることを目的としたものである。とりわけ、遠隔環境におけるアートセラピーや心理支援が、医療・教育・社会福祉の各領域において公的制度としても確立している国もあり、支援者・クライアント間における非対面コミュニケーションの質的な設計や、表現の共有に関する実践知が豊富に蓄積されており、現地の支援機関・実践者の観察を通じて得られた知見は、日本国内への支援実践に対しても重要な視座を提供するものであった。渡航先で見出された視点は、遠隔であっても媒介物（表現された作品）を通じた「間主観的空間」を形成できるかどうかという点であり、クライエントとセラピストのあいだに作品が位置づけられ、「共に見る」「共に考える」ことを支える存在として働いているかどうかであった。記録されたセッション内容は、逐語録として保存し、後に分析対象とした。

(2) 海外諸都市でのフィールドワークは、以下の通り、地域特性を鑑みながら実施された。調査地はフランス（アルザス地方、フランス領ポリネシア)、イギリス（バーミンガム、ロンドン)、フィンランド（ヘルシンキ)、ドイツ（ベルリン)・ポーランド（ワルシャワ・クラクフ)、オーストリア（ウィーン)、スイス（チューリッヒ)、アイスランド（レイキャビク)、ノルウェー（オスロ・トロムソ)、カナダ（トロント)、ニュージーランド（オークランド)、オーストラリア（シドニー、ニューカッスル）など多岐にわたり、地域ごとに公共空間のあり方、子どもへのまなざし、創造性を支援する制度と文化が大きく異なっていることを実感した。特に注目したのは、図書館におけるプレイゾーンや、野外での遊具・造形スペース、またコミュニティベースで運営されるアートイベントなどである。こうした場面において参与観察を行い、子どもたちの身体の動き、素材との関わり方、保護者・スタッフの声かけや距離、介入のスタイルを記録した。

(3) 育児と研究の両立の経験も、重要な実践的データの源泉となった。研究者自身が１歳の子どもを帯同しながら渡航・生活・調査を行ったことにより、公共空間の使われ方を、親子双方の立場から経験することとなった。図書館や博物館に併設された遊び場を現地の人たちと一緒に使用する中で、日本との違いを身体で知る機会が増え、子どもを介した現地住民との交流、施設スタッフとの対話を通じて、制度だけでは測れない「文化の厚み」を感じ取ることができた。これらは面接内容やフィールドノートに記録されており、今後の分析素材となる。

以上のように、本研究では、臨床的視点（アートセラピー)、文化心理学的視点（公共空間と文化)、そして研究者自身の身体性を通じた実践的視点（帯同育児）を統合し、多層的なデータを得る構成となっている。

なお、本研究では当初、米国ハワイ州マカワオに滞在し、遠隔地における芸術療法や心理支援の実践について調査を行う予定であった。しかし、現地で発生した大規模な山火事の影響により、マカワオでの滞在および調査は実施困難となった。
そのため、代替案として、同じ米国内のロサンゼルスおよびホノルルを訪問し、主に公共のプレイグラウンドや図書館等における子どもの表現行動の視察、および遠隔心理支援に関するインフラや地域コミュニティの状況を調査した。また、マカワオと同様にポリネシアンを含む先住民族が居住し、海に囲まれた地理的・文化的条件を共有するニュージーランドおよびフランス領ポリネシアを中心に、オセアニア圏における芸術療法や心理支援の実践についてもフィールド調査を行い、遠隔心理支援の地域特性を比較検討した。結果として、当初予定していた調査テーマに即した視点からのデータ収集が可能となり、計画時に想定していた水準に準じる研究成果を得ることができた。

7　研究結果・成果

本研究から得られた成果は、主に以下の 3 つの視座に整理される。
(1) メディアとしての作品と「間」の生成
(2) 公共空間における創造性と文化の許容度
(3) 帯同育児を通じたグローバル・リテラシーの体感

(1) メディアとしての作品と「間」の生成

遠隔支援におけるアートセラピー実践では、描かれた作品が単にクライエントの表現を記録するものにとどまらず、両者の間に第三項として立ち上がる「媒介物」としての機能を果たす場面が繰り返し観察された。作品は自他の感情・経験・記憶を仮託できる「象徴的な場」であり、セラピストがそこに能動的に関心を向けることで、クライエントは直接的な自己開示ではなく、「表現されたものとの距離」をとったまま自分を語ることが可能となる。

また、対面のセラピーと異なり、遠隔という制約によって生じる「距離」そのものが、逆説的に作品を媒介としたコミュニケーションに集中させる傾向も認められた。遠隔環境では作品の共有・時差的なコメントなどがむしろ非同期的な「熟成」を可能にする側面があり、これは今後の臨床文化のあり方に新たな地平を提示しているといえる。

(2) 公共空間における創造性と文化の許容度

海外の都市部・郊外の図書館・ミュージアム・プレイグラウンドでは、創造的表現を促す空間設計が広く定着しており、特に「思いのままに表現する・つくる」ことを妨げない素材や導線、片付けの自律性、スタッフの関与スタイルなどが観察データとして記録された。たとえばヘルシンキ中央図書館に併設されたアート・プレイルームでは、子どもたちは石や枝、紙、粘土、木材といった自然素材に自由にアクセスでき、保護者やスタッフは極力干渉せず、「素材と子ども」が主体的に関係を結ぶプロセスを尊重していた。

また、言語やルールの前に、感覚的・空間的な「身体での理解」が前提とされる場面も多く、日本の公共空間が「意味」や「禁止」を中心とした設計であるのに比して、「余白」や「予期せぬ反応」が制度に内在化されている点に注目すべきであった。これは、単に空間デザインの問題ではなく、文化的な「許容性」としての、想定外や多様性を受け止める社会的態度のあらわれでもあると考えられる。

(3) 帯同育児を通じたグローバル・リテラシーの体感

研究者自身が乳幼児を帯同しての滞在を経験するなかで、距離をおいた学術的観察と交差して、生活の地平を共にする参与観察者としての記録が数多く蓄積された。たとえばベビーカーでの各国の公共施設を巡る中で、段差や授乳室の有無、子ども向け設備の充実度といった物理的環境の違いに加え、周囲の人々の視線や声かけ、社会的な許容度の差異など、多文化環境で子育てをする際の感覚的な肌触りが詳細に記録された。このような移動動線の設計、子連れへの社会的まなざし、施設

利用時の受付・対応に見られる違いは、単なる便利さや不便さを超えて、その社会が「親と子」をどのような存在として扱っているかの文化的表象でもある。

日本における「母子を社会から分離」する育児観や、育児者にかかる過剰な規範圧に比して、欧州諸国やカナダ、オセアニア地域では、子どもが「社会の一員として共にいる」ことが前提とされ、空間や制度がそれを支えるよう構成されていることが確認された。このような現場での気づきは、育児者としての視点と研究者としての視点の往還から得られる知見であり、まさに本研究が目指した「グローバル・コンピテンシー」の実践的理解の一端といえる。

結果のまとめ：アートセラピーと公共性・国際的文脈の接続

本研究の軸であるアートセラピーと、遠隔支援・多文化的文脈の交差点には、いくつかの重要な論点が浮かび上がった。それらは「個の表現」と「集団への接続性」、「医療・心理・教育の境界を超えた支援」、「文化による表現の枠組み」の３つに要約される。

(1) 個の表現と公共性の媒介

アートセラピーは伝統的に、クライエントの内的世界を安全に扱う「閉じた場」として実践されてきたが、今回の研究では、公園・図書館・ギャラリーなどの公共空間での子どもの創作を観察する中で、「開かれた創作」と「社会との関係づけ」がアートの力によって成立する可能性が見えてきた。

例えばトロントの公共図書館でのプログラムでは、幼児から小学生を対象に、アーティストとスタッフが対話を通じて作品制作を促し、同時に保護者の観察・参加も歓迎されるような設計がされていた。ここでは、自己表現が「社会的承認」と出会うことで、自尊感情や探究心が刺激される環境が実現されており、これはクライエントの個人的変容にとどまらず、表現を通じた「社会的自己」の形成プロセスとしてのアートセラピーの可能性を示唆している。

(2) 境界を越える支援と「支援環境」の再構成

本研究の中で観察された事例の多くは、「治療」や「指導」といった枠を超えて、アートを媒介とした「伴走」や「環境づくり」としての関与に重きが置かれていた。たとえば、トロントの図書館では、子どもの創作活動に関わるスタッフが心理士や教師ではなく、図書館司書やボランティアであり、専門職の役割を分業せず「関係性のホスト」として多様な背景を持つ子どもを迎え入れていた。

これは、日本で見られる「専門職の明確な境界」とは対照的であり、セラピーを成立させるのは「誰が支援するか」ではなく、「どのような空間・関係性があるか」に重心が移っていることを意味している。つまり、アートセラピーの視点を制度的・空間的に拡張していくには、セラピストだけでなく、学校・地域・家庭を含む「支援環境」そのものの創造性を問う必要がある。

(3) 文化の中の表現様式と心理的安全性

海外各地での参与観察では、子どもたちが遊びの中で示す身体動作、素材の選択、共同性の現れ方に顕著な文化的差異が見られた。たとえば、カナダのトロントの屋外プレイグラウンドでは、年少児が道具を自由に使って穴を掘り、水を運び、さながら工事現場のように構造物をつくる様子が見られたが、大人はそれに過剰に介入せず、安全性よりも「試す自由」を優先していた。

一方、日本では「失敗しない創作」や「汚さない制作」が暗黙のうちに求められ、表現が抑制される場面が多い。これは「心理的安全性」の文化的定義が異なることを意味しており、子どもがどれだけ「見通しなき探索」を許容されるかが、自己表現の深度と持続に大きく影響する。

このような文脈においては、アートセラピー的なアプローチを個別支援にとどめるのではなく、「文化と育児環境」の中に埋め込み、社会全体として表現を肯定する気風を醸成する必要があるだろう。

結論と今後の展望：創造的支援とグローバル・コンピテンシー

本研究では、「アートセラピーを用いた遠隔心理支援とグローバルコンピテンシーの醸成」を主題とし、欧州・北米・オセアニアを中心とする都市での参与観察・調査を通じて、多文化的支援のあり方と、表現を介した育成環境の違いに焦点をあてた。

特に重要な視点として浮かび上がったのは、以下の 3 点である：

(1) 支援とは「関係の再編成」であること

アートセラピーやプレイの場面で、子どもと支援者、または子どもと環境との関係がどう結ばれ直すかが、支援の質を決定している。とりわけ北欧をはじめとする先進諸国では、表現を媒介にした「第三の場」が巧みに設けられ、直接的な指導ではなく、観察と承認に重きを置くことで、子どもが自己を他者と共に発見していくプロセスが支援の中核となっていた。

(2) アートセラピーの実践を「社会的に再設計」する必要

本研究で観察した実践の多くは、美術館・図書館・公園など日常的な公共空間に自然に組み込まれていた。これは、専門家主導の閉じられた空間でのセラピーではなく、生活文化の一部としての「支援」のあり方であり、アートセラピーがより広いオープンシステムの文脈の中で再定義される可能性を示している。今後、日本においてもセラピー的支援のスキルと文化的習慣を架橋するような「公共的支援文化」の創出が求められる。

(3) グローバル・コンピテンシーとは「問い方の文化的柔軟性」

多文化社会におけるグローバル・コンピテンシーは、特定の知識や技能ではなく、「自分とは異なる他者にどう問いを立て、理解しようとするか」の態度に表れる。

とくに芸術や創造的活動を媒介にした異文化理解は、論理だけではなく感覚と体験によって関係性を築くものであり、今後の教育・心理支援の重要な柱となることが期待される。

今後の展望としては、本研究で得られた知見を以下の３つの形で日本社会に還元していく予定である。

（１）国内における子育て支援や教育現場における創作活動の支援モデル構築
（２）アートセラピーの公共的導入に関する提言と研修事業の展開
（３）留学生・移民背景の子どもたちへの遠隔支援プログラムの開発

また、本研究成果は、2025 年度６月発売予定の『創造と創発の心理学（１）：つながりがもたらす新たな秩序』（仮）と、９月発売予定の『創造と創発の心理学（２）：越境による変容と癒し』（仮）の２冊の学術書として刊行予定であり、複数章において本研究の実践的示唆が整理されている。

本報告が、制度と現場、個人と社会、支援と創造のあいだを柔らかに結ぶ知見の一助となることを願う。

以　　上